

教義論題 「行信不離」について考察せよ

一. 総 説

一) 定 義

・「行信不離」とは、大行と大信(浄信)は、阿弥陀如来の回向成就の賜物だから、行者に於ける相状は互いに離れて働くものではないことをいう。

・「大行」とは、無礙光如来の名を称する行いをいう。

・「大信」とは、本願力廻向の信楽、真心をいう。尚、ここに「信楽」とは、疑蓋間雑なきこと、「真心」とは、金剛心(体はお名号)をいうと窺われる。

二) 趣 旨

ア) 行信不離の相状は、『本典』『略典』の教学構造を構成するのみならず、『御消息』『信行一念章』に明らかである(Ref P476)。

イ) 行巻から別開された信巻の大信釈で宗祖は、「無上妙果の成じ難きにあらず、真実の信楽まことにうるごと難し」(Ref 註P211)、「浄信獲がたく極果証し難し」(Ref 註P480)とされ、獲得困難の理由として「往相の回向によらざるがゆゑに、疑網に纏縛せらるるによるがゆゑに」と示される(Ref)。

ウ) しかれば、若し「行信不離に違背する論理」に固執するとすれば、それは宗祖が明かされた本願力廻向の行信の法義を疑う煩悩(疑法蓋)の所為に該当すると窺われる。

二. 出 拠

一) 行信不離を示す出拠

行巻の大行釈

・「つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり」(Ref 註P141)。

信巻の行巻の大行釈を受けた「結示」

・「もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし」(Ref 註P229)。

信巻の「三信結嘆」

・「三心すでに疑蓋雑はることなし、ゆゑに真実の一心なり。これを金剛の真心と名づく。金剛の真心、これを真実の信心と名づく。真実の信心はかならず名号を具す。」(Ref 註P245)。

証巻の「四法結釈」

・「それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし」(Ref 註 P312-3)。

『ご消息』「信行一念章」

・「信の一念・行の一念ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆゑは、行と申すは、本願の名号をひとこゑとなへて往生すと申すことをききて、ひとこゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをききて、疑ふころのすこしもなきを信の一念と申せば、信と行とふたつときけども、行をひとこゑするとききて疑はねば、行をはなれたる信はなしとききて候ふ。また、信をはなれたる行なしとおぼしめすべし」(Ref 註 P749)。

二) 念佛と信心の関係を示す出拠

笠間の念仏者の疑ひとはれたる事

- ・「念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり」(Ref 註 P746-7)。
- ・「本願の念仏を信樂する」(Ref 同上)。

三) 実践を重んじて念佛を先行配置する出拠

浄土和讃冠頭讃

・「弥陀の名号となへつつ、信心まことにうるひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり」(Ref 註 P555)。

三. 義 相

一) 「行信不離」は、本願力廻向の行が成立する相状を端的に著す。

・「念佛往生の願」に誓われた三心と十念とは、阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところであり(Ref 「大信釈結釈」註 P229)、真実の信心は必ず名号を具す(Ref 「三信結釈」註 P245)とあるからである。

・「至心信樂欲生」は、乃至十念を修飾する副詞に当たるから、元来、文法上は、十念の称えぶりを表すと取るのが相当である。

・その深義を訪ぬるに、宗祖は、『観経疏』を手掛りに観経上品上生の三心(至誠心、深心、回向発願心)のうち、弘願の三心が、第十八願に当たるとして(Ref2011/12/9 別科本典ご講義)、至心信樂欲生を三心と捉え、その構造をご本典で字訓・法義に亘って詳説され、疑蓋間雑なき信樂一心に納まると示された(Ref「三心一心」)。

・以て、天親論主の釈功を指す尊称たる「一心(の華文)」は、信心そのものを指す。

よって、本願力廻向の行が行者において行として成立するのは、偏に疑蓋間雑あることなく(信樂)本願力廻向の賜物として頂戴できるか否かの一点に懸っていることになる。宗祖が、何故に行巻から信巻を別開されたかは、まさにこの点に存すると窺うことができる。・してみれば、「行信不離」は、斯かる相状を端的に指し示す謂いであることになる。

二) 大行とは、回向成就された称名をいう。

ア)「つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり」であるから、大行とは、本願力廻向の賜物であり、「無礙光如来の名を称するなり」とあるから、仏より賜った衆生の称名を云うことになる。

イ)尚、所行学派に立つ伝統教学は、大行を「本願名号」と捉えるも、行巻の理証・文証に照らして妥当性を欠くと窺われるが、その詳細は引用文献に委ねる(Ref)。

三) 大信とは、回向成就の信樂、真心をいう。

ア)「大信」とは、本願力廻向の信樂、真心をいうと窺われる(Ref 「信文類別序」註 P209、「現生十益」註 P251)。

イ)しかして、「信樂」は、疑蓋間雑なきことを求めており、宗祖ご法義(「行信不離」)に対する疑法蓋を厳しく廃除するものと窺うことができる。

ウ)しかるに、本願寺第三代宗主覚如上人は、直弟子系統と峻別して自らが浄土真宗の正当の継承者であることを主張せんが為に『口伝鈔』を著して「三代伝持の血脈」を謳われ、「信心正因 称名報恩(略称「信因称報」)」の教学を提唱された(Ref)。

エ)この教学は、三業惑乱を経て、所行学派が席卷する今日の伝統教学(Ref)に継承された。その特徴を列挙してみると

信心と称名との間に前後関係を設け、信心が先で称名が後になるとし、

大行として、衆生行位の称名を認めず、

称名は、信心獲得に関与するものではなく、信心獲得後の報恩感謝の念佛のみに限定されるとする。

四) 伝統教学の「信因称報」教学の検証

【検証総論】

ア)伝統教学の構造は、歴代の『安心論題教材』に文証として明確に示しうる通り「信前行後」の論理構造を有している(Ref)。

イ)しからば、伝統教学は、宗祖教学の「行信不離」の論理構造とは相容れないから、「行信不離」の法義を疑う煩悩(疑法蓋)の所為に相当すると解される。

ウ) そうだとすると、疑蓋間雑あることなきを求める大信の趣旨に照らして、信因称報説を踏襲することは、宗学としての妥当性を欠くとしなくてはならない。

【伝統教学の抱える致命的欠陥】

信因称報説に立つ伝統教学は、次に示すが如き少なからぬ致命的欠陥を抱える。即ち、
ア) 第一に、信前称名を認めず(Ref)、
・第二に、大行とは法体名号であるとして、教行証の行位としての衆生の称名念仏を許さないから、お念仏の声を社会から消失せしめる方向に働き、
・第三に、信心とは、法体名号を唯ひたすら領納するものとして信心獲得課程を不明確ならしめ観念論に傾かしめたからお聴聞の伝統の薄れゆく戦後社会ではお同行を育てる助けにならず(却ってその障害となり)、その結果、
・第四に、称名念仏を通して衆生が「如来の招喚の勅命」に聞遇する道を閉ざし、それ故、又
・第五に、能入位(第四十一位)から能度位(等覚)に亘る信心の構造を明らかならしめる問題意識を持たず、初門位から究竟位に至るお育ての教学が未確立の儘放置されている懸念がある。

【検証各論】

・ **信前称名を許さないのは自力の機執を排除できないからであるとする(Ref 昭和三十年代勸学寮刊「安心論題摘要」)が妥当か**

(結論) 妥当ではない

(理由) 大行釈の示す所は、大行と大信とが、共に衆生の往相として本願力廻向されたものであることを示しており、大行とは無碍光如来の名を称する(称名念仏すること)であると示されている。

よって、称名念仏という行為自体が本願力廻向されているのであるから、称名念仏する行為は、阿弥陀如来から回向された行を行わずの行為に他ならず、自力の機執を排除することを許さないとする伝統教学の観点は妥当性を欠くことになるかと解する。

・ **信心を先行させることによって自力の機執を懸念しないで済むか**

(結論) 済まない。

(理由) 名号を唯ひたすら領納することによって信心が得られるとする伝統教学の下では「信心獲得の具体的プロセス」が明示されておらず、お同行にとり不親切極まりなく、却って、自力の機執が入りこむ危険性が高いからである。下記のエピソードが是を物語る。

記

「木津西念寺支坊光撰坊の回りには、深川勸学和上の法薙に座し僧俗が捨てた信心が山のように転っている(ウイキポータル深川倫雄)。

・ **信心とは法体名号を唯ひたすら領納するものであるとする(伝統教学の立場)が妥当か**
(結論)妥当ではない

(理由)信心獲得プロセスを観念論に傾かしめ、その結果、お聴聞の伝統の薄れゆく戦後社会ではお同行を育てる教学とはなっただけでなかったからである。換言すれば、称名念仏を通して衆生が如来の招喚の勅命に聞遇する道を閉ざしてしまったからである。

・ **信一念のときにはまだ念佛はでていないと見る見方(Ref2010/5/22 本典講義)は、妥当か**

(結論)妥当ではない。

(理由)「ああ辛といふは後なりとうがらし」は、衆生の身口意の三業に昇った後に相当する。そうすると信前行後の譬えではなく、歡喜初後の譬えというべきである。

・「何事も意業が先行するから信が先だ」とご講師が主張される「意業」も、衆生の身口意の三業に係り、如来回向の「信樂」とは次元が異なるから、論理の俎上にすら乗らないというべきである(Ref 1)。

四、結 び

・「信心正因 称名報恩(信因称報)」の伝統教学は、「行信不離」の宗祖教義を疑う疑法蓋に当るから、厳しく廃除されるべきものと窺います。

・しかし、称名念仏を信心獲得後の報恩感謝の次元にのみ押し込める(衆生行位の念佛を認めない)伝統教学の立場は、名号の活動相の意義を捨象し、大經に示された「名聲超十方」の仏意に違背するのみならず、行巻で明らかにされた真実行の意義を損ない、信巻を別開してその本質を明示された宗祖の御意に違背するものと窺います。

・しからば、行信不離に立脚した新たな「安心論題」の提示が喫緊の課題であると窺うものであります。合掌

五、出 拠(文中凡例)註 註釈版

・ 『顕浄土真実教行証文類』

・ 『浄土文類聚鈔』

因みに『略典』解説には「大行を積するなかに、大行・浄信を併記して行から信を開き、また第十七願・第十八願成就文を一連に引き、或いは行一念積に続いて信一念を積する等は行信不離を明らかにするものである」とある。

- ・ 『ご消息』「信行一念章」
- ・ 『浄土和讃』
- ・ 勸学寮刊『安心論題提要』
『新編 安心論題綱要』
- ・ 『龍谷教学』第四十七号研究発表論文「乃至十念の仏意を窺う…仏の口業と衆生の聞名との関係」)
- ・ 筆者ウェブサイト
ア)<http://syohgakuji.web.fc2.com/h2243Ver.2.pdf>
イ)http://syohgakuji.web.fc2.com/h2252_Ver.4.pdf

合掌

正覚寺仏壮例会 毎月第一日曜日午後八時より
正覚寺仏婦例会 毎月十六日午後七時より

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥